現代日本文化としての「鳥と人間の関係」に関する一考察

奥　野　卓　司**

1. はじめに

人間は、飛翔する鳥に対して「憧れ」と「怖れ」のアンビバレントな感情を抱いている。とくに西欧では鳥に対する怖れが強く、しばしば人間にコントロールできない不気味な存在として位置づけられている。一方、日本人も同様に「憧れ」と「怖れ」の両面を抱いているにもかかわらず、「花鳥風月」という美しい言説が今日でも定着している。

本稿では、古代、近世から今日に至るまでの日本文化における鳥の表象を解読するとともに、今後鳥と人間の関わりを追究するための研究の方向性を提起したい。

2. 現代人と鳥との関わり方の諸類型

2.1 鳥と鳥類学者の現状

現在、世界の鳥の種類は約1万種とされており、地上の脊椎動物全体（約3万6000種）の約3分の1と大きな割合を占めている。しかし、ハチドリなどの小さな鳥から、ダチョウなどの大きな鳥まで多様に存在するため、全体の正確な数は把握しきれていない。このように、鳥類は種類も個体数も他の動物に比べて多いのが大きな特徴だが、一方、それを研究する鳥類学者（ornithologist オーニソロジスト）はそれほど多くはない。さらに彼らは基本的には野鳥を対象とする研究者であり、飼鳥や家禽を対象とする研究者はほとんどいない。とくに日本では、大学に「鳥類学部」も「鳥類学科」もなく、科学研究費補助金の小項目に（養蚕学や霊長類学は記載されていても）鳥類学という記載はない。

さらに鳥類の中では、野鳥より人間に身近なニワトリの研究のほうが積極的に行われており、家禽学の学会や研究団体が複数あり、鶏肉や鶏卵を扱う家禽業界の団体や研究所も多い。それは、昆虫学の中でも日本が世界の最先端にあるカイコに関する生物学（昔は養蚕学と称した）をはじめ、世界的にも害虫学（ウンカやシロアリなど）、ミツバチの研究など有用性のある研究が大部分を占め、チョウやカブトムシなどの研究はほとんど行われていない状況と類似している。

家禽以外の鳥類学者の多くは基本的に、フィールドでの野鳥の観察や調査を主要テーマにしている。「バードウォッチャー」として思い浮かべるのは、一眼レフカメラに望遠レンズ、高機能な双眼鏡を持ち歩いている姿だろう。ただし「バードウォッチャー」という呼ばれ方は、本人たちにとってあまりうれしくないようだ。彼らは、そのような行為を「鳥観（とりみ）」と呼び、「日本野鳥の会」では「探鳥（たんちょう）」と称している。その違いは、鳥をただ眺めているのではなく、森や湖沼などに入って珍しい鳥を探し、写真を撮影するところにある。そういう行為に非常に真面目に取組み、「決して鳥に害を及ぼさない」など、仲間内で厳格なルールがある。もっとも今はスマホで手軽に撮影しSNSに簡単にアップできるため、組織化されていない、あるいは自身も野鳥マニアとは思っていない層も増えている。

バブル全盛期には、人工的に鳥を観られる釣り堀的な場所があちこちに作られた。そこに鳥が集まれば地域活性化につながるという発想から、都

*キーワード：鳥の表象、両義性、花鳥風月、自然誌、文化誌
**関西学院大学社会学部教授

心の再開発地区にも作られている。バードウォッチャーたちは、そのような人工的な自然を嫌う傾向がある。しかし、何が人工的で何が自然なのかは曖昧なので、彼ら自身にも混乱はあるようだ。

2.2　鳥を「飼う」と「食べる」について

鳥類研究者以外に「鳥に関わる人々」としては、数はそれほど多くはないもののハンター、剥製師、鳥のカービングやデコイづくりを趣味にしている人、アクセサリーやフィギュアを集めるのが好きな人などがいる。さらにあまり表面には出てこないが、鳥を飼っている人々がいる。日本におけるペット総数の減少の中で（イヌが最盛期の1300万頭から900万頭を割り、ネコも950万頭程度で推移している）、唯一鳥だけは猛禽類や小鳥などを飼う人は（もともと絶対数は少ないものの）それほど大幅には減少はしていない。ひそかに集まってメジロなどの鳴き声を競いあうイベントに参加したマニアが、愛鳥週間に逮捕されたというニュースが報道されると、世間の人々はそれが犯罪なのかと意外に思われるかもしれない。

筆者が子どもの頃1960年代には、多くの街に小鳥の専門店があり、ジュウシマツやカナリアを飼ったり、オウムに言葉を覚えさせたりする家庭も珍しくなかった。小学校でも小鳥を飼育しており、粟などをエサとして与えていた。しかし今日では、生物多様性の観点から、日本国内においても野鳥の捕獲や狩猟は、法律で原則として禁止されている。また近年は、「ワシントン条約」や「動物愛護管理法」による規制から、国内の野鳥の飼育は原則的にできないことになっている。ただし、ブンチョウ、セキセイインコ、カナリアなど、国内で飼育して増やされたもの、および海外から輸入されたものについてはそのかぎりではなく、各鳥の愛好団体が存在し品評会も開催されている。また鳥専門のペット病院もあるし、鳥カフェも人気がある。

しかし実際に（当事者は意識していないだろうが）、圧倒的に多いのは鳥を食べる人だ。ニワトリの数は鳥全体の中でも圧倒的に多く、しかもその大半が肉を食べるためのブロイラーと卵を産ませるための白色レグホンであることから、われわれの食生活を支えている多くの鳥は工場で生産されていることになる。

最近では、「人工的に飼育されているニワトリ」への逆の流れとして、「地鶏」のイメージが高まっている。実際、高級な鳥料理専門店やデパートの地下食品売場では、地鶏やその卵が特別に高価な価値をもつ食材として売られている。しかし地鶏は伝統的なものと思われていても、実はそのほとんどが日本の各地で外国の品種を掛け合わせて、近年新たに作られた品種である。

団塊世代の多くは、地方に行けば、親戚が来た際などに家で飼っているニワトリの生みたての卵を食べさせたり、絞めてご馳走になったなどの体験があるはずだ。卵は完全栄養であるという「神話」は意外にも根強く、高度成長期までは、病人のお見舞いに卵を持参する慣習があったし、卵酒は風邪の際の栄養補給になると信じられていた。今でも中国や東南アジアの市場に行くと、生きたままの鳥が籠の中に入れられて、それをその場で絞めて売ってくれる。ところが、日本では衛生的な理由からそれを敬遠し、その反動としてわれわれ自身はナマの鳥にさわったりさばいたりすることはしたくもないのに、「地鶏」という言葉を聞くと、自然で健康なものを食べているような気になるという矛盾をかかえている。

なぜ日本の卵は、物価の優等生と呼ばれるくらい戦後一貫してほとんど価格が変わらないまま市場に流通しているのだろうか。日本人に卵を食べるスタイルが定着したのは江戸時代で、江戸では鶏卵問屋の組合ができたほどだった。それほど日本人は、江戸時代から卵料理が好きだったという証左であろう。しかも、ご飯に生卵をかけて食べられる国は日本だけだと言われている。これも実際は韓国やイタリアなどでは生卵を食べているのだが、日本人の多くはそう思い込んでいる。たしかに、生卵はサルモネラ菌の付着や侵入が原因で食中毒を起こす危険がある。日本の採卵養鶏場では、約90%以上が白色レグホンのバタリーケージ飼育で、大手採卵場では徹底した消毒と検査をしており、「産卵後約1週間の賞味期限」を少なくとも販売時には徹底しているが故に、生卵が食べられる。

今日、無農薬の安全な飼料で路地飼いしているニワトリを市場に出そうとすれば、当然それなり

のコストがかかるので価格が高く、それを私達が日常的に食べる機会は少ない。実際、中国では平飼いのため、産卵が気温の影響を受け、近年は暑さのために、卵が1個7元（約170円）と従来の2倍にもなり、庶民には縁遠いものになっている。だから、今多くの日本の養鶏産業で行われているインテグレーションシステム（養鶏採卵の工場システム）について頭から否定的に考え、地鶏のほうが素晴らしいと思い込んでいるとすれば、それは一種の信仰といえよう。もし人間がより自然な食を求め、鶏とよい関係をもとうとすれば、アメリカのアーミッシュや日本のヤマギシ会のような生活全体を受け入れなくてはなるまい。

2.3 人間本位の「害鳥」／「益鳥」の区分

人間は、自分たちの勝手な都合で「害鳥」と「益鳥」を区分する。たとえば、日本では古来カワウを使って鵜飼をしていたと推測されるが、今日では、カワウはアユなどを食べる害鳥とされており、環境省も狩猟対象可のリストに含めている。同様に、スズメやカラスも害鳥である。一方、ツバメは益鳥とされており、その理由は害虫を食べてくれるからだ。また、ツルは北海道では益鳥、鹿児島では害鳥とされ、地域によって判断が異なる。

そもそも害鳥とされる理由は、鳴き声がうるさい、農作物を食べるなどだが、それらはまったく人間の都合である。そして、それぞれの時代、それぞれの地域の人間の生活にとっての利害から、益鳥か害鳥かを判別しているにすぎない。環境省の鳥類保護の理由は、その種が稀少だからという理由にある。したがって有害か有益かにかかわらず、稀少であれば、コウノトリ、トキ、アホウドリのように保護の対象になっており、生物多様性維持の観点から積極的に増やしていくとり組みが行われている。

一方、ヨーロッパではイルカショーを実演する水族館は皆無に等しく、彼らからは日本のクジラやイルカの追い込み漁は厳しく批判されている。今日では、こうした国際的な動物愛護の観点から、鵜飼や鷹狩など日本人が鳥を使って行う行為はいかに伝統的だと主張しても限定されている。またすでに述べたように、かつては鳥を飼う家庭も珍しくなかったし、昔の縁日の店では鳥がおみくじをひいてくる芸が人気を集めていたが、今ではそれも原則として禁止されている。その結果私達が鳥と日常的にふれあう機会はきわめて限られているというのが実情だ。

しかし、手の上に乗せて可愛がる手乗り文鳥は、本当に鳥をいじめていることなのか。自宅の庭の木に巣箱を作ったり、餌台を作って餌を与えたりすることも許されざるべきなのか。筆者自身の経験からも、子どものときに、なんらかのかたちで鳥とふれあうことは大事ではないかと思う。少なくとも、鳥にふれる機会もないまま成長して、大人になった人間の都合だけで、同じ鳥に益鳥、害鳥というレッテルを貼ることには疑問を感じる。

鳥と人間との関係について、ここでもう一つ考えるべきは、鳥インフルエンザの問題であろう。毎年、東アジアや中国で強毒性の鳥インフルエンザが発生しているが、日本では幸いここ数年、大量発生はない。しかし、アジアから毎年渡ってくる渡り鳥は（野鳥保護者にとっては言いにくいことかもしれないが）、少数ではあってもインフルエンザ・ウィルスを保有しており、鳥インフルエンザのウィルスは毎年のように日本に入ってきている。鳥インフルエンザは鳥だけに感染すると思っている人もいるかもしれないが、ウィルスである以上、すべての生物に感染する可能性は皆無ではない。

それにもかかわらず、日本で鳥インフルエンザが爆発的に拡大しないのは、大きく報道はされていないが、鶏舎で感染が発見されると、ただちにその半径10 km以内のあらゆる鳥を殺処分しているからだ。これを動物愛護の観点から残酷だと思うか、だからこそ日本の卵はナマで食べられるほど安全だと思うかは様々だろうが、少なくとも多勢の人々や専門家がそれに抗議したことはない。一方、家禽業者は、鳥インフルエンザを運んでくるのは渡り鳥だから、渡り鳥をコントロールすべきだと考えている。しかし、真に害をもたらしているのは、ニワトリでも野鳥でもなく、ウィルスである。インフルエンザが流行した際、だれも罹患した人間を非難しないし、それを媒介しているブタを殺したりはしない。しかし万一、鳥イ

ンフルエンザがニワトリから他の動物、とくに人間に感染したら（事実、中国ではそのような報道がなされているが）、そのときに鳥に関わる団体や研究者はどのような態度をとるのだろうかと関心をもっている。

3. 鳥の起源からの文化誌的解読

3.1　鳥に抱く「憧れ」と「怖れ」

人間は古くから鳥に憧れを抱き、洋の東西を問わず、世界中で鳥への憧れを表現した曲が数多く歌われている。その代表が『コンドルは飛んでいく（El Condor Pasa）』だろう。1960年代半ばに活躍したアメリカのデュオ、サイモン＆ガーファンクルがペルーの民族音楽をもとにポピュラーソングとしてカバーし、世界的な大ヒット曲となった。日本のフォークグループ、赤い鳥の『翼をください』、中国の二胡の代表曲『燕になりたい』など、その例は世界で枚挙にいとまがない。

一方で、人間は鳥に対して、コントロールがきかない恐ろしい存在として、怖れも抱いてきた。アルフレッド・ヒッチコック監督の映画『鳥（The Birds）』をはじめ、『ハリー・ポッター』に登場するフクロウのように、不気味な状況を表象する存在として鳥が描かれている例も多い。

日本でも近代までは、鳥はどちらかといえば恐ろしく不気味な存在として扱われることが多かった。たとえば、舞台いっぱいに南禅寺の山門がせりあがることで知られる歌舞伎『楼門五三桐（さんもんごさんのきり）』では、盗賊の石川五右衛門が山門の上で煙管（きせる）を吹かしながら「絶景かな、絶景かな」と叫んでいる。そこへ明国の武人からの手紙をくわえた鷹が飛んできて、山門の下にいる真柴久吉（羽柴秀吉）が実父の仇であることを知らせ、仇討ちをそそのかす。真柴久吉が巡礼姿でその門をくぐる時、手水鉢の水に映る五右衛門の姿を見て、「石川や浜の真砂は尽くるとも、世に盗人の種は尽きまじ」と挑発すると、五右衛門は久吉に小柄を投げつけるという名場面である。

また、近世の浮世絵や物語などでも、鳥は人間を超越した存在として描かれている場合が多い。たとえば、歌川広重の『名所江戸百景』のうち「深川洲崎十万坪」では、寛政3年（1791年）の大地震と大津波によって壊滅した広大な土地を巨大な鷲が空から眺めているという現代美術も顔負けの大胆な構図で、今でもコレクターの間で「役絵」と呼ばれているほど人気がある。

このように、人間が鳥に憧れや怖れという二律背反的な感情を抱くのは、ヒトにない飛翔能力を鳥がもっているからである。そして、そのアンビバレントな感情の根源は、人類の進化の歴史の中に見出すことができる。地上という二次元を生活空間とする齧歯（げっし）類（ネズミやリスなどの原初種族）の一部が、樹に登って、サルに進化して以降、彼らは地上の大半の動物が属する二次元の食物連鎖の輪から脱出することができた。樹上には目の前に食糧（果実）があり、また安全な環境が保証されていた。だが、鳥は三次元空間を自由に移動しているため、そのサルも子どもなどが襲われる危険はあった。つまり、動物で三次元の世界をもつのは霊長類と鳥類だけであったから、ヒトの祖先である霊長類にとって、鳥だけが天敵ということになった。

このように有利な環境が保証されていたにもかかわらず、霊長類のなかで木から下りたサルだけが、わざわざ危険な二次元の世界に戻って地上生活を始め、やがてヒトに進化した。人類学では、これを「進化」と説明する。しかし、生態学的にみれば、むしろ「退化」ではないのか。直立二足歩行を始め、他の動物を狩猟し食糧にしたといえば勇ましくきこえるが、実際は、肉食動物から逃げつつ樹上から落ちてきた果実を拾って食べ、ときどき群れで草食動物を襲い、その肉にありついていたのが実態だ。そしてそういう生活が長く続いても、ヒトが遺伝子の記憶として、もっとも恐れていたのは三次元の動物、すなわち鳥類だった。こうして人間は、鳥に対してアンビバレントな感情を抱くようになったと考えられる。

一方、近年は鳥類の分類についても大きな変革が生じている。動物学における鳥類分類の最初の体系は、1676年にフランシス・ウイラビィとジョン・レイによって編集された『鳥類学』（*Ornithologia*）で定義された。これをもとに、「分類学の父」と称されるカール・フォン・リンネが、他の動物同様の分類体系「綱・目・属」の階層構造を定め、その中で鳥類は、生物学的分類目の鳥（ちょう）

綱(こう)に分類された。

従来の系統分類においては、外形、行動のよく似たものを近似種としてきた。鳥でも生態、行動、骨格の類似性が分類の根拠とされた。すなわち、同じ形態、同じ色、同じ食物を摂取しているものを血統的に近い種として同じ分類してきたのである。ところが、鳥は空を飛ぶという脊椎動物にしては特異な特徴をもち移動範囲が広いため、遺伝的には遠い種でも、同じ環境下で生活する場合、外見的にはよく似た形態になるので、しばしば近似種として扱われてきた。

だが近年では、ゲノム解析による研究が進んだ結果、鳥類の分類は大きな見直しを迫られることになった。哺乳類では、ゲノム解析してもそれほど大きな差異はない。しかし鳥はゲノム解析をしてみると大きな違いがあることが多く、従来の誤解から生まれた分類を是正するのに、この方法が大きく貢献している。

なかでも大きな発見は、鳥の祖先が恐竜であることが確実になった点である。つまり恐竜は絶滅したのではなく、その一部が鳥に進化したことがゲノムのレベルで明らかになったわけだ。多くの人は、恐竜が鳥の祖先であることは何となく知っていても、さらに細かく分類して鳥脚類恐竜と獣脚類恐竜のうち、どちらが鳥の祖先かときかれれば、その名前のイメージから鳥脚類と答える人が多いだろう。しかしゲノム解析の結果、実は獣脚類恐竜の一部が祖先であることが判明した。鳥脚類恐竜は四足歩行のままだったのに対して、二足歩行した獣脚類恐竜が使わなくなった前足を翼に進化させたという。もっとも「突然変異」と「自然淘汰」を繰り返して、恐竜の一種から徐々に進化することによって、飛ぶ爬虫類、つまり鳥になったという「進化論」説もあれば、恐竜の一種類が最初から「鳥」になったとする「胚淘汰」説もある。だが、本稿の目的はそのいずれかを解くことではないので、ここでは2つの説の紹介にとどめておきたい。

3.2 謎が残るニワトリの起源と日本への伝搬

古代文書の解読や行動学的な観点に基づく生物学の知見およびゲノム解析から、イヌ、ネコをはじめ人間が飼っている家畜の起源はほぼ解明された。先述のように鳥の系統樹もしだいに明らかになりつつある。しかし、個体数がもっとも多く、われわれの生活の中であまりにも身近なニワトリについては、進化史のどの段階で、今日の姿になったのかについては、まだ謎が残っている。

そのため動物考古学において最後の論争になっているのがニワトリの起源とされているが、これまでしばしば起源論争が繰り広げられた結果、赤色野鶏という野生のニワトリの種類の中のどれかというところまでは絞られ、また、それらが棲息しているのは、中国南部、タイ、ラオス、カンボジアの国境地帯であることも明らかになった。

3種類の赤色野鶏のうちの1種が、これらの山岳地帯での高床式住居の住まい方と密接な関わりがあるとされている。床から落ちた残滓にありつくために野鶏が寄ってきて、やがて人間が意図的に餌を与えるようになり、そこに居ついて、まさにニワトリ（庭の鳥）になったという。しかし、これらは一方的に家畜化されたというわけではなく、今日でも家畜化と野生化を繰り返していると推定されている。

さらに、ニワトリは「順位」を決定するために激しくつつきあう。赤色野鶏は気性が激しいので、互いのつつきは非常に鋭い。その特性を利用して、人々はどちらのニワトリが強いかを賭けるようになり、さらには、祭りなどで互いのニワトリを闘わせるというゲーム化も始まった。いわゆる「闘鶏」である。ここには食肉として、あるいは産卵利用としてのニワトリの姿はない。すなわち、動物の家畜化は、少なくともニワトリの家禽化は、一般に信じられているように使役や食料を得るために始まったのではなく、信仰のシンボルや遊戯や癒しなどから始まったと思われる。

このニワトリがいつどのようなルートで日本に入ってきたかもまだ不明な点が多い。筆者が以下に述べることも、従来の複数の説と知見を総合した仮説的な提示である。

ニワトリについての最古の記述は『日本書紀』や『古事記』にあるかのように考えている人もいるかもしれない。たとえば天照大神が天の岩戸に隠れて世界が暗闇に覆われ、さまざまな禍が発生したとき、困り果てた八百万(やおよろず)の神々は、アメノウズメに踊らせ、ニワトリにトキの声を告げさせた

という話を思い浮かべるだろう。だから、ニワトリは少なくとも卑弥呼の時代から日本にいたのではないか、遅くとも農耕が始まった弥生時代には存在したのではないかと記述している「専門書」まである。

だが、弥生時代においては、稲作が生業の中心になったことはよく知られている。そして、この時代の日本の稲作農業の特徴は、当時、東アジア全般に拡大していた稲作農法と比較して家畜をともなうことが少ない点であった。鳥に関しても、今日でいう「アイガモ農法」はあったが、ニワトリを家禽化していたという具体的な証拠はない。したがって、日本の縄文時代、弥生時代には、少なくとも家畜としてのニワトリはいなかったとほぼ推定できる。

『古事記』や『日本書紀』にニワトリが登場したとしても、その時代にニワトリが存在したことを意味しているのではない。さらに、稗田阿礼が『古事記』を口述した時代にさえ実在したのかは不明で、江戸時代に本居宣長が解釈したように、『日本書紀』が記された奈良時代初めには、神格化された象徴としてほぼ確実に存在していただろうと推測できるにすぎない。

奈良時代にニワトリが入ってきたとすれば、仏教とほぼ同じ経路をたどったと考えられる。すなわち、中国南部からシルクロード、さらに朝鮮半島を経て、日本に渡来したのではないか。これは、ほぼ多くの研究者が合意している伝搬ルートである。しかし、東南アジアで赤色野鶏に始まるニワトリの変化を調べていくと、家畜化した野鶏が徐々に南下して、山岳地帯から東南アジアの半島部に伝搬していく傾向が見られる。それをさらに延長すると、今日のインドネシア、フィリピン、台湾という経路が浮上してきた。その延長上に、台湾からさらに琉球（南西諸島）、奄美から九州本土へという南方ルート、つまり柳田國男が唱えた「海上の道」も推定される。これらの経路は闘鶏の伝播との共通性が見られるが、今後、台湾、沖縄などの在来種のゲノム分析による比較によって明らかにされることを期待したい。

このように、日本の伝統文化とされているものも唯一単系の文化的伝播ではなく、複数の経路を通り、最終地点の日本列島で複合して生まれたものも多いと思われる。ニワトリの日本への伝搬も、その一つの事例であろう。

その影響として、日本文化におけるニワトリの表象にも両義性があることを指摘しておきたい。多くの歴史書では、先の天の岩戸の事例のように、ニワトリは一貫して吉兆の象徴としてとりあげられてきた。同時に、朝を告げる印として神格化されたためか、平安時代には宮廷の吉兆を占う存在ともなった。やがて美しさを追求するため、オナガドリ（尾長鳥）のような鳥も生まれたとされる。『古事記』や『日本書紀』の中では、カケの枕詞として庭にいる鳥＝「庭っとりカケ」と記述されており、おそらく奈良時代の人々には、鳴き声がカケと聞こえたのだろう。これがニワトリの由来となったとも考えられるが、江戸時代にはその鳴き声もトウテンコー（東天紅）、すなわち、東の空が明るくなるとき鳴く声に聞こえるとされるようになった。

ところが一方で、12 世紀に伝わったとされる中国の民間説話を描いた絵巻『地獄草紙』が奈良国立博物館に所蔵されているが、その中の地獄の一つに「鳥地獄」というものが描かれている。生前に動物を虐待したり食べたりした仏教者は鳥地獄に落ち、火をまとった恐ろしいニワトリに追い

図 1　「波山」竹原春泉画『絵本百物語』

掛け回されつつかれるとされている。そこで日本の一部の地域では、ニワトリを食べることは禁忌とされてきた。

また、江戸時代の百科事典である『和漢三才図会』には、ニワトリに似た姿で燃え残りの木などを食べる食火鶏（ヒクイドリ）の記述がある。さらに江戸時代の奇談集『絵本百物語』では、食火鶏をモデルとした「波山（ばさん）」という怪鳥として紹介され、真紅のとさかをもつ大きな鳥が口から赤々とした火を噴き出している様が描かれている。同様の説話は各地に存在し、たとえば伊予の国では「婆娑婆娑（ばさばさ）」と呼ばれていたが、ニワトリが羽をバサバサさせる様子をあらわしていると同時に、娑婆をひっくり返した言葉でもある点が興味深い。このようにニワトリの表象は両義性をもってきた。

4. 古代日本における鳥と人間の関係

興味深いことに、縄文人は狩猟民でありながら、「鳥」の土偶や土器をほとんどつくっていない。縄文人にとって鳥は重要な食料だったはずで、実際、三内丸山遺跡（現在の青森県）ではカモ・ガン類が全鳥類の骨の 80% をこえているし、キジを食糧とした地域も多い。にもかかわらず、鳥を調理する道具や遺構は出土していない。

縄文時代は採集・狩猟・漁携活動を生業とし、弥生時代は狩猟・漁携活動も行ったが、稲作農耕が生業活動のかなり大きな割合を占めていたとされている。縄文時代の家畜はイヌだけであったが、弥生時代にはイヌの他にブタとニワトリを飼育していたことがわかっている。さらに、縄文時代にはシカとイノシシは主要な狩猟獣であり、時代によって差はあるが、土偶にもそれぞれ描かれているのに対して、鳥は一貫してほとんど描かれていない。

また、土器を模様づけた縄目は、蛇の表象と読む人々もいる。蛇は人間がコントロールできない地上の動物なので、蛇と鳥は、地と天のいずれに神を見るかということにつながろう。とすれば、縄文人は「黄泉の国」を信じ、天に神の国を見ていなかったということになる。しかし、一方、アニミズム的な全体の中に鳥が溶け込んでいたのだとも思える。鳥を「鶏頭」のごとく最上段に置くのはトーテミズム的な思考であり、少なくとも縄文時代には、鳥だけをとり出して神格化する思考ではなかったと言えよう。

だが、弥生時代に入るとさまざまなかたちで鳥の表象が増える。古墳時代には、大和地域より渡り鳥の多かった出雲周辺で鳥に関する説話が非常に増えてくる。とくに、鳥の鳴き声と結びつけて語る説話が多くなり、たとえば『出雲国風土記』では、アヂスキタカヒコネ（阿遅須枳高日子、味耜高彦根命）という言葉がしゃべれない神がいたが、父親のオオクニヌシが息子を船に乗せて池に放したところ、白鳥が飛んできて、このとき声をあげて叫んだことから言葉をしゃべれるようになったと記されている。『日本書紀』においても、垂仁天皇の息子のホムツワケ（品牟都和気命）は長い間言葉がしゃべれなかったが、やはり白鳥の声を聞いて声を発したという。さらに、垂仁天皇は夢のお告げで、出雲に息子を参拝させると話せるようになったという神話に転移していく。出雲地域においては、これら以外にも鳥への崇拝は多く語られており、やがて鳥が飛んでいくところという意味で「鳥取」という地名が名づけられた。

とくに、毎年同じ時期に飛来し、ある一定時期を過ごすとまた飛び去っていく渡り鳥には、この世とあの世を結ぶ神聖さも感じられていたと思われる。下関の日本海に面した土井ヶ浜遺跡では、弥生時代の女性がウを抱いて埋葬されている石棺が発掘されている。ウミウは季節ごとに飛来するため、神の使者と考えられてきたからだろう。また、今日の奈良県の坪井遺跡や清水風遺跡から発掘された土器には、「鳥装」（翼に似た衣装）が描かれていることが多い。これらから、弥生時代からすでに、シャーマンは鳥の姿をして神に近づいていく存在とみなされていたと推測できる。

5. 江戸の文化表象に見る鳥と人間の関係

5.1 大名と庶民の二重構造の鳥飼い文化

鳥との直接的な関わりで、近世、とくに江戸時代にはブームとも呼べる状況が生まれる。

江戸時代には、さまざまな鳥の図譜や飼い方の本が書かれている。もともと海外から長崎を通じて持ち込まれた鳥が多かったため、島津家や鍋島

家などは鳥の資料や図絵を豊富に所蔵し、鳥の博物学が大名の道楽や趣味となっていた。なかでも島津藩主であった島津重豪（しげひで）が書いた『鳥名便覧』がよく知られている。また、旗本でありながら本草学者でもあった毛利梅園の『梅園禽譜』には138種の鳥が描かれているが、そのうちキュウカンチョウ、キバタン、ショウジョウインコなど十数種は海外産の鳥である。当時の飼育書は大変実用的で、鳥の種類と飼育方法が解説されており、挿絵も多用されて非常にわかりやすいものとなっている。さらに出版もされて広く流通しており、それらは現代でも通用する内容も含んでいるほど高度な内容であった。

だが、大名だけでなく、庶民も鳥に興味をもち、歌舞伎、浮世絵、黄表紙などにも鳥がよく登場する。さらに、平賀源内、木村兼葭堂（けんかどう）など収集マニアたちのネットワークが存在し、伊藤若冲や花鳥画の絵師や戯作者は収集家のところで鳥を見せてもらうこともあった。また実際に鳥を飼っていた絵師もいたので、鳥の目の位置や爪の鋭さや飛翔の加速度の力を実感していたと思われる。しかもその中には明らかに海外から持ち込まれたと思われる鳥も描かれており、こうした花鳥画や若冲の作品、兼葭堂などのマニアの飼い鳥ブームを見ると、「鎖国」にもかかわらず、多くの海外産の鳥や動物が日本に輸入されていたことが窺える。

このように、庶民の間にも「鳥飼い」が浸透していたのは、最初は大名が飼育していた海外産の鳥が、城外にもち出され、増殖していったものと考えられる。やがてカナリア、ブンチョウ、ジュウシマツなどが国内で繁殖に成功し、日本中に広まった。そして金魚や朝顔同様に、鳥も珍しい種類を飼い育てることを楽しみ、それらを自慢しあうネットワークができていた。外国の鳥を輸入し、鳴き声や羽の色の美しさ、尾の長さなどを競い合うほどの多様な品種改良ができたのは、当時の日本人がメンデルの遺伝法則は知らなかったが、養蚕で、その土地の気候や桑の生育状況に適合したカイコの品種改良を行い、それらを『養蚕秘録』として各地で保存していたからである。シーボルトは、各地のカイコの原種とともに、この書を持ち帰ったが、これにはカイコ特有の母性遺伝の法則が正確に記されていた。こうした品種改良技術が、江戸時代の庶民によって飼鳥に応用されたのである。

図2　伊藤若冲作『向日葵雄鶏図』（宮内庁三の丸尚蔵館所蔵）のフィギュア（奥野企画、村田明玄原型制作、海洋堂造形制作）

5.2　鳥飼いオタクの代表としての滝沢馬琴

前述したように、江戸時代には庶民の間でも鳥を飼う風習が定着するが、なんといっても鳥飼いオタクの代表は戯作者の滝沢馬琴で、最大100羽以上の鳥を飼っていた時期もあったらしい。馬琴が鳥を飼い始めたのは、江戸時代末期の文化10年（1813年）で、ちょうど代表作『南総里見八犬伝』を構想していた頃である。最初に飼ったのは紅鶯（ウソ）で、その後、金雀（金糸雀、カナリア）、蝦夷鳥などもいたようだ。馬琴はなかでもカナリアを飼う名人で、日々の詳細な出来事を綴った『馬琴日記』の中で、カナリアの飼い方について書いているが、それ以外にも鳥に関する記述が多く、挿絵にも多数の鳥が登場している。

それにしても、なぜもともとは北アフリカ産のカナリアが、江戸時代の日本に存在したのだろうか。その経路を探ると、大航海時代にヨーロッパから持ち込まれたカナリアが、江戸時代になって

外国人から武家に献上され、その後、武家から庶民へと飼鳥として拡散したもののようだ。『唐通事会所日録』という長崎における貿易の記録書にも「…宝永六年（1709年）三月二十日『唐船、いんこ鳥、ぐわび鳥、金雀鳥各一羽持ち渡りたる候』」という記述があり、海外から日本へ鳥が入ってきていたことが示されている。

そのなかに、鳥の飼育についても、江戸と上方では大きな違いがあり、江戸のほうが飼鳥がさかんであった。その流れが、今日の「お酉さま」という祭礼にもつながっていると考えられる。これに対して上方では、鳥を飼うよりも小犬を飼うことが流行っていた。大阪道修町には犬専門の薬屋まであり、この薬屋は犬の飼育書を書いて無料配布していたことでも知られている。

5.3 「孔雀茶屋」「花鳥茶屋」など見世物興行の流行

江戸時代初期には、京都四条河原、江戸堺町、大坂道頓堀などで珍しい動物を見せる見世物興行が流行した。また、人口が増大し都市が賑わいをみせるようになると、様々な茶店が開かれるようになった。それらが江戸時代後期には、それまでの花見や祭礼時だけの仮設の施設から恒久施設へと定着していった。

さらに、18世紀末に人気だった見世物興行も、小屋がけの興行から、園地での展示へと定着していき、それが動物を展示して見せる茶屋として特化していった。その茶屋のことを大坂では「孔雀茶屋」、江戸では「花鳥茶屋」と呼んでいた。これらは現代のテーマパークのようなものであり、詳細は不明だが庶民がレジャーとして、珍しい鳥の見物に行ったのではないかと考えられる。

大坂の孔雀茶屋は、庭園とともに設けられた野外の行楽施設で、後の野外遊園地（「阪神パーク」など）の原型となる施設であった。江戸の花鳥茶屋は、雨天でも観覧できる構造の施設で、講談調の解説が売り物となっていた。大座敷では落語の夜講があり、酒食を提供するとともに、異形のニワトリの展示をするなど娯楽と見世物の要素が強いものであった。その性格は嘉永6年（1853年）に浅草に開設された遊園地、「花屋敷」に引き継がれていったのではないかと推察できる。

大田南畝（なんぽ）は、黄表紙『魂膽夢輔譚（こんたんゆめすけばなし）』の中で、大坂の孔雀茶屋を「江戸の花鳥茶屋と似たもの」と述べている。

図3 「孔雀茶屋」（秋里籬島（1798）『摂津名所図会』）

「昔は浅草上野山下には名鳥茶屋（同書では後に花鳥茶屋の表現を用いる）とて、珍しき鳥獣をあつめおきて見せたる茶屋ありしとぞ。入口に居る男かんばんを指さし……孔雀を御覧じてお茶をあがれ、代はお戻り十二銅……まず入口よりご覧じまし。是なるは人の真似して言語鳥九官、つぎは鸚鵡の鳥……奥なるは日光山筑波山の雷獣ともうしましてかみなりのけだもの、次はむささび・野日光のももんが、この尾の長いのが朝鮮猿……お咄の種に御覧じまし、前銭にはお貰い申しませぬ、代はお戻り々」
（「魂膽夢輔譚」弘化2年（1845年））

いずれにしても、江戸の町民の多くは現代人より鳥のことをよく知っていた。また、鳥を食べることも流行になっていった。たとえば歌舞伎『仮名手本忠臣蔵』の七段目「祇園一力茶屋の場」では、日常的にニワトリが食べられていたことを物語る場面がある。大星由良之助（おおぼしゆらのすけ）は主君だった塩冶（えんや）判官（はんがん）の仇討ちの決意がさとられないよう、祇園茶屋で遊興にふけっている。本来なら精進潔斎しなければならない主君の命日前夜、元塩冶家家老でありながら寝返った斧九太夫が訪れ、タコの足を食べるように勧めて、由良助に討ち入りの決意があるのかどうかを探ろうとする。そのとき由良助は「扨（さて）この肴では呑めぬ〳〵　鶏しめさせ鍋焼きさせん」と誘う。これは赤穂事件の起こった元禄一五年（一七〇二年）、祇園の茶屋で鳥鍋を出しており、鳥肉を食べていた証拠だと言えよう。

また、当時の世相を図と詳細な解説で記録した『守貞漫稿』には、生卵を食べたり、海苔でご飯と卵を巻いて食べていたりしていたことが記されている。これらは海外の風習にはなかったので、当時、日本に来ていたオランダ人などは大変驚いたと記されている。

これらのことは、江戸時代の生き物に関する悪法とされる、五代将軍綱吉が発令した「生類憐みの令」からはかなり違和感がある。だが、近年の研究によると「生類憐みの令」は一つのお触れとして発令されたものではなく、たとえば「殿様が通る道に犬猫がいた場合、わざわざ排除しなくてもよい」などの細かな決め事が複数集まったものであるということが明らかにされてきた。そして、鳥についての記述はほとんどない。

以上のように、「鎖国」時代と言われ、「生類憐みの令」が発令されていたとされる江戸時代においてさえ、海外産も含む多種の鳥が日本人の生活の中に深く浸透し、飼い鳥、見世物などのかたちで楽しまれていたのだった。

6.「花鳥風月」再考

従来日本の芸術作品を対象とした美学では、鳥は美しいもの、良きものということをほとんど疑いのない前提として論じられてきた。そうした日本人の美意識を象徴する言葉が「花鳥風月」であろう。たしかに今でも、多くの人々が、四季おりおりに「花鳥風月」という言葉を口にする。この言葉は、季節ごとの気候と、それに応じて変化する美しい自然の風景の象徴であり、またそれらをこよなく愛する日本人の繊細な情緒を表わす言説として多用されてきた。

しかし、「花」「月」を風雅の象徴とするとしても、なぜ「獣」や「魚」ではなく「鳥」なのだろうか。日本が海に囲まれ、河川の豊かな地形にあることを考えれば「魚」はとり上げられてもよいし、照葉樹林文化、里山の国であるとする先人たちの「日本文化論」をふりかえれば、日本人にとって「獣」との関わりも深いと考えられる。それにもかかわらず、なぜ「花獣風月」や「花魚風月」でなく「花鳥風月」なのだろうか。日本文化を象徴する概念とされ、日本人自身が漠然と受け入れてきたこの概念は、しばしば相互に矛盾した意味をはらんでおり、「日本文化」とは何か、「日本人の美意識」とは何かを問うと答えは単純ではないことを象徴している。

たしかに古来、日本には「花鳥風月」を題材にした物語、詩歌、音楽、絵画は多い。たとえば、『万葉集』編纂者の一人とされる大友家持は、とりわけ鳥に関心があったようで、鳥にまつわる歌が比較的多く選ばれている。また『枕草子』でも『源氏物語』でも、花鳥風月のそれぞれがしばしばとりあげられている。とくに近世以降、多くの絵師が鳥を描いてきた。「花鳥画」というジャンルがあるように、狩野派の主要な題材は「花鳥風

月」であった。また、伊藤若冲や鶴亭ら、江戸時代の絵師たちも、鳥、とくにニワトリやツルの絵を数多く描いたことで知られている。

このように、「花鳥風月」は、日本文化のあらゆる分野において作品の主要なテーマになっており、今日でも、マンガ、アニメ、ポピュラー音楽、カレンダーやテレビコマーシャルなどの中で、若者から高齢者までのほぼ全年代で「良きモノ、コト」として当然のように浸透している。そうした意味では、「花鳥風月」は、「風流」や「風雅」を象徴する言葉として広く定着し、あまり深く検討されることもなく、日本人共通の美意識であるかのように思い込まれてきた。

たしかに鳥が大空を悠々と飛んでいる姿や、森の木に止まって一声、二声鳴いている姿や行動に美と魅力を感じる人が多いだろう。だが、現代のわれわれは間近に鳥を見る時、本当に「美しい」という感情だけを抱くだろうか。鳥の顔や目が人間とはまったく異なるので怖さを感じ、ヒトと対極の生き物であることを実感することもあるのではないだろうか。

そもそも今日の私たちは、鳥と親しく接しながら暮らしているのか。たとえば季節ごとの桜や紅葉を愛でるように、あるいは、満ち欠けする月に夢のある物語を感じるように、木々をわたるさわやかな風に心地よさを感じるように、鳥に親和的な感情を抱いているだろうか。むしろ都市化された生活において、実際に鳥が私たちの目につくのは、ゴミ・ステーションを荒らすカラスの姿や、夕刻の駅前に集まるムクドリやヒヨドリの騒がしい鳴き声である。そうした現実をふまえれば、現代の人間にとって鳥は必ずしも好ましい存在と感じられているとは言えまい。

すでに述べてきたように、鳥を描く、飼う、食べるなど、鳥が意識されたかたちで人間の生活の中に浸透したのはむしろ近世であった。江戸時代以前には、文化表象においても実際の生活においても、「鳥」単独で意識的に表現されているものはそれほど多くはない。むしろ鳥は、移りゆく季節や自然全体の中の「景観」の一部として扱われていたようだ。その意味で、「花鳥風月」は江戸文化に限定的な特質ではあっても、すべての時代を通じ、現代に至る日本文化を通底する特質とは言えないのではないだろうか。

繰り返し述べてきたように、人間は鳥に「憧れ」と「怖れ」の両面を抱いている。とくに西欧では怖れが強いのに対して、日本人は「怖れ」を抱く一方で、「花鳥風月」という美しい言説が受け入れられているところに、むしろ「日本文化」の両義的な特徴があると言えよう。そして今日では、鳥を愛でるだけではなく、鳥類がもつ不気味さにおびえたり、都市の鳥害に迷惑させられていると感じたりなど、西欧以上の多義性が現代日本人の心性に深くかかわっていると言えよう。

7. おわりに／今後の研究の方向性

現在、鳥について深く究明するために、下記の3つの方法で研究が進められている。

第1は、多くの生物学系の研究が採用しているゲノム解析である。この成果によって、鳥類学は大きな見直しを迫られることになった。

第2は、文化人類学的な研究方法である。この方法では、主としてフィールドワークによって、その社会の人々と鳥との関係を探り、野鳥とのつき合い方や、家禽になる経緯などを調べている。

第3は、文化誌的な方法である。すなわち鳥が洞窟壁画、絵画、彫刻、文学、歴史的史料などでどう扱われているかを調べる文化表象論的なアプローチである。

本稿では、主として第3の文化誌的なアプローチを用いて、鳥と人間の関係について論じてきた。文化誌は広範な総合学的領域であるが、鳥と人間の関係を論ずるにあたって、この観点が浮上してきた背景には、従来の「鎖国令」や「生類憐みの令」を再検討しようとする歴史学の変化がある。すなわち、公的な文書に記述された国家政策、権力闘争、宗教支配、植民地支配などの公式記録よりも、絵画、文芸、音楽などの文化や芸術、さらには一見些末に思える人々の生活、習俗の日記や手紙などの解読を通じて、歴史の実態に迫ろうとする認識が生じてきたからだ。

さらに、人類学、民族学、民俗学、社会学、心理学、地理学などの関連学問の発想や手法を歴史研究に応用することによって、事象を超えた歴史の深層構造の理解につながり、全体的把握をめざ

す方向も浮上してきた。

こうして、日本だけにこだわる閉鎖的な歴史観でなく、世界史の中の日本、あるいは東アジア地域研究のなかでの日本文化研究として位置づけていく必要があろう。

そして、自然誌と文化誌の両面から、鳥類標本やゲノムの解析と、鳥に関しての文書、図絵の比較も可能になれば、鳥と人間の関係についての新たな研究が深まっていくと考えられる。

参考文献

1．F. E. ゾイナー，1983，国分直一・木村伸義訳，『家畜の歴史』，法政大学出版局
2．松井今朝子，2010，『歌舞伎の中の日本』，日本放送出版協会（NHK 出版）
3．関西学院大学キリスト教と文化研究センター　樋口進［編著］，2013，『自然と問題の聖典　人間の自然とのよりよい関係を求めて』，キリスト新聞社
4．林良博，森裕司，秋篠宮文仁，池谷和信，奥野卓司，［編著］，2009，『ヒトと動物の関係学　第 1 巻　動物観と表象』，岩波書店
5．遠藤秀紀，2010，『ニワトリ　愛を独り占めにした鳥』，光文社新書
6．秋篠宮文仁，2000，『鶏と人－民族生物学の視点から』，小学館
7．ロナルド・トビ，2008，『全集　日本の歴史　第 9 巻「鎖国」という外交』，小学館
8．網野善彦，2005，『日本の歴史を読み直す（全)』，筑摩書房
9．若生謙二，2010，『動物園革命』，岩波書店
10．細川博昭，2006，『大江戸飼い鳥草紙』，吉川弘文館
11．田中千博，2006，『食の鳥獣戯画　江戸の意外な食材と料理』，高文堂出版社
12．原田信男，2003，『江戸の食生活』，岩波書店
13．奥野卓司，2014，『江戸〈メディア表象〉論　イメージとしての〈江戸〉を問う』，岩波書店
14．周達生，1995，『民族動物学－アジアのフィールドから』，東京大学出版会
15．小松左京，1992，『鳥と人　とくにニワトリに感謝をこめて』，文藝春秋
16．松井章［編著］，2015，『食の文化フォーラム 33　野生から家畜へ』，ドメス出版
17．原信田実，2007，『謎解き　広重「江戸百」』，集英社新書
18．辻惟雄，2005，『日本美術の歴史』，東京大学出版会
19．塚本學，1998，『歴博ブックレット⑤　江戸図屏風の動物たち』，財団法人　歴史民俗博物館振興会
20．鈴木七美，2017，『アーミッシュたちの生き方－エイジ・フレンドリー・コミュニティの探求』，人間文化研究機構　国立民族学博物館
21．矢野真吾，2017，『NHK カルチャーラジオ　歴史再発見　ニワトリはいつから庭にいるのか　人間と鶏の民族誌』，NHK 出版
22．曲亭馬琴［作］尾上菊五郎［監修］，2015，『平成二十七年初春　国立劇場公演上演台本　通し狂言南総里見八犬伝　五幕九場』，国立劇場文芸研究会

An Observation of the "Relationship Between Birds and Humans" as Part of Contemporary Japanese Culture

ABSTRACT

Since the Neolithic period, humans have held ambivalent emotions of "longing" and "fear" towards birds that fly freely in the three-dimensional space. For this reason, the ambivalence of birds is expressed in various cultural representations such as paintings, music, movies, and novels. The sources of such consciousness are deeply rooted in the origin of birds which evolved from dinosaurs.

On the other hand, while holding the same kind of ambivalent emotions, the Japanese have been appreciating the "birds" comprising of "*Kachofugetsu*" (flowers, birds, wind, and the moon) as part of the "landscape" which beautifully decorated the romantic natural elements of the four seasons. The construction of such emotions was largely influenced by the ecological geography of Japan as it belongs to the temperate zone and is a long island surrounded by the sea that extends from the north to the south.

However, the Japanese are not keenly interested only in "birds". Although there was a time during the Edo period when birds permeated into the lives from feudal lords to painters, connoisseurs, and commoners alike, this was something of an exception. There were also temporary "bird booms" during the Heisei era and the latter half of the Showa era, both led mainly by the "bird *otaku*" (connoisseurs).

In addition, the present day Japanese have limited opportunities than before in terms of having birds as pets or having direct contact with them, partly because of the international argument on biological diversity, perspective on protection of rare animals, and laws and regulations. Contrary to their aesthetic image, negative impressions of birds such as how they eat and scatter garbage, damage caused by their defecation, loud irritating sound of flocking birds, have become stronger. This is to say that the feelings towards birds that are deeply embedded in the Japanese minds are more ambiguous than in the West, and thus, there is a need to interpret the diverse "relationship between birds and humans" through the combination of zoology and cultural history.

Key Words: representations of birds, ambivalence, *Kachofugetsu,* natural history, cultural history